
XSPA設立10周年に寄せて——XSPAとJ-STAGEの歩み——

元XSPA理事

元科学技術振興機構 J-STAGE担当課長

宮川謹至

学術情報XML推進協議会（XSPA：XML Scholarly Publishing Association）が創立10周年を迎えられましたこととお喜び申し上げます。

XSPA設立当時、私はJ-STAGEの開発担当としてデータベースの国際標準化に取り組んでいました。JSTは1999年頃からXML▶注 [1] の検討を進めていましたが、J-STAGE1ではデータ形式としてBIB形式▶注 [2] とSGML▶注 [3] を採用していました。しかしながら、この形式ではデータの二次利用等が難しいことから、2009年度より検討に着手した新システム（J-STAGE3）では、国際標準化を推進するためXML形式を採用することとしました。ちょうどその頃、XSPAの前身であるワーキング・グループSPJ（Scholarly Publishing Japan）が、NLM DTD▶注 [4・5] に日本語を含む多言語対応の提案を行い、2011年3月にNISO▶注 [6] のJATS0.4（NLM DTD 3.1）▶注 [7] が公開されました。これを受けて新システムではJATS0.4を採用することを決定し、利用学会の協力の元に行った全文XMLパイロットプロジェクト（実証実験）を経て、2012年5月にXML形式によるJ-STAGE3をスタートしました。JATS0.4はまだドラフト版でしたが、SPJの助言等を得て正式版が出るのを待たずしてXML化に踏み切りました（2019年にJATS1.1にバージョンアップ）。

このような経緯から、私は2012年6月のXSPA立ち上げの発起人に加わり、日本を代表する電子ジャーナルサイトであるJ-STAGEをXML推進のための土台（実験台）として活用することによりXMLを普及させるとともに、ひいてはそれがJ-STAGEのさらなる躍進に繋がるものと考え、微力ながら本会の活動に参加させていただきました。時に、協議会メンバーとしての立場とJ-STAGE運営担当の立場の板挟みから、セミナーの開催方針などについて異を唱えご迷惑をおかけしたこともあったかと思えます。

この10年、J-STAGEも書誌XML作成ツールの開発やJ-STAGE掲載誌のXMLデータ形式への移行等に取り組み、2020年には全文XML作成ツールとDOAJ・PMC▶注 [8・9] 用XMLデータ変換ツールを開発、提供いたしました。PMC用データ変換ツールは初期のXSPA分科会での議論がようやく実を結んだものと認識しています。XSPAからは数々の助言とXML活用のための提言など、多くの支援をいただきましたこと、この場を借りて御礼申し上げます。

J-STAGEのカレント誌における書誌データのXML化は2021年度末時点で約1,700誌と少しずつではありますが着実に増加しています。しかしながら、全文XML化は約150誌に留まり、いまだ低いレベルにあると言わざるを得ません。我が国の科学技術イノベーションの発展に資するため、日本発の科学技術情報の流通発信力の強化およびオープンアクセスの推進を図るためにもさらなるXMLの普及と活用の促進を期待します。

今後の協議会のご活躍をお祈りいたします。

▶注

- [1] XML Extensible Markup Language 文章の見た目や構造を記述するためのマークアップ言語
- [2] BIB形式 J-STAGE独自のASCIIテキスト形式
- [3] SGML Standard Generalized Markup Language 文書の構造やデータの意味などを記述するマークアップ言語を定義することができるメタ言語
- [4] NLM National Library of Medicine 米国医学図書館
- [5] DTD Document Type Definition 文書型定義
- [6] NISO National Information Standards Organization 米国情報標準化機構
- [7] JATS Journal Article Tag Suite
- [8] DOAJ Directory of Open Access Journals オープンアクセス学術誌とその論文を掲載するウェブサイト
- [9] PMC PubMed Central NLMが提供する生物医学・生命科学のオンライン論文アーカイブ